

唐代作家新疑年録 (8)

——王渙・王仁裕・歐陽詢・蘇味道・張薦・

鄭虔・武元衡・楊宰・李吉甫・李嶠

植 木 久 行

(1) 王 渙 (字 文 吉)

○宣宗大中十三年己卯(八五九) 生——昭宗天復元年辛酉(九〇一) 十月三日没、享年四十三歲。

〔論 拠〕

一九五四年五月、唐末の天祐三年(九〇六)に作られた盧光濟撰「唐故清海軍節度掌書記太原王府君〔渙〕墓誌銘」の誌石が、広州市越秀山の鎮海樓の背後から出土した。盧光濟は、王渙と三たび同僚關係²にあつた親友である。その墓誌銘には、天復元年(九〇一)、王渙が広州(番禺)に鎮する清海軍節度使(嶺南東道節度使の改称)徐彦若の辟召に応じて、都長安³から南下する途中急死した様子を、次のごとく記している。

我齊公〔徐彦若〕以中外迭処、倚注斯在、遂頒竜節、往鎮番禺。君〔王渙〕既認旧寮⁴、願榮介從、不以滄溟為遠、不以扶養為難、捧記室〔掌書記〕之辟書、被金章〔賜紫金魚袋〕之華寵、因授考功郎中、兼御史中丞之職。時則画鶴

方泛、慈顔正歛、撰良辰入賓署者、信宿（二泊）是期矣。無何、前數日、以膏肓受疾、癘毒浸深、曾未浹辰（十二日）、奄至馱謝（世を去る）。時乃天復辛酉年十月之三日、去府城（広州）之一舍（二泊）地曰金利鎮也。享年四十有三。これによれば、王渙の死は天復元年辛酉十月三日である。その生年は享年「四十三」によって逆算。

〔備考〕

王渙の事跡は、この墓誌の発見によって、かなりわかるようになった。岑仲勉の「従王渙墓誌解決了晚唐史一兩個問題」（同『金石論叢』上海古籍出版社、一九八一年所収。もと『歴史研究』第九期（一九五七年）に発表）は、王渙墓誌の全文を収録してその基礎的な研究を行ない、今日もなお、王渙に関する必読文献であるといつてよい。たとえば、王渙の字は従来、『新唐書』卷七十二中、宰相世系表二中、王氏太原第二房の条や、『唐詩紀事』卷六六、王渙の条、『全唐詩』卷六九〇の小伝によつて、「群吉」と考えられてきた。この点に関して、岑仲勉は、『後漢書』（卷六四）延篤伝の（李賢等）注「渙爛、文章貌也」を参照して、王渙の字は墓誌に記す「文吉」こそふさわしいと考え、「群吉」に作るの

は伝聞の訛であると見なした。人名と字との意味上の関連に着目した指摘であり、『唐才子伝校箋』卷十、王渙（渙の誤り）の条（周祖譚・賈晋華執筆）も、この岑説に従う。王渙の字は文吉と考えてよい。

ちなみに、『唐才子伝』卷十には、王渙の晩年を、「後以礼部侍郎致仕、年九十、見『睢陽五老図』」とする。これによれば、その享年は九十以上になり、墓誌の「四十三」とは大きく異なる。しかし、この『唐才子伝』の説は、じつは晩唐の王渙と北宋の王渙とを混同した軽率な誤りである。詳しくは、『唐才子伝校箋』卷十や、呉在慶「晚唐若干詩人生平事迹及其作品考弁」のなかの「関于王渙生平之若干問題」など参照。

なお、王仲鏞『唐詩紀事校箋』下（巴蜀書社、一九八九年）や、孫映達『唐才子伝校注』（中国社会科学出版社、一九九一年）などは、まだ王渙の墓誌を参照しておらず、当該条の校注は、きわめて不十分である。周助初主編『唐詩大辞

典』（呉在慶執筆）などは、すでに墓誌によって、王渙の生没年を「八五九—九〇一」とする。

〔参考〕

王渙の詩は「妍詞麗唱」（墓誌）、「情は婉麗を極む」（唐才子伝）などと評され、幽怨をいだける歴史上の佳人や才子をテーマとした「惆悵詩十二首」（『才調集』巻七）で有名。この連作のなかには、唐代小説の著名な女主人公、崔鶯鶯や霍小玉が、緑珠や王昭君・楊貴妃らとともに、すでに詩の題材に取りあげられている点でも特異である。『唐才子伝校箋』（周祖譔・賈晋華執筆）は、大順二年（八九二）、進士科に及第する以前（作者三十三歳以前）の作か、と臆測する。

注

- (1) 後述の岑仲勉の論文所収のものによる。周紹良主編『唐代墓誌彙編』（上海古籍出版社、一九九二年）には未収。
- (2) 盧光濟は、王渙が逝去したとき、同じく清海軍節度使徐彦若の幕中にいた。岑仲勉の論文参照。
- (3) 韓偓「無題」詩（『全唐詩』巻六八三）の序とその詩によれば、天復元年辛酉（九〇一）の春、王渙は吏部員外郎の職にあり、呉融らとともに韓偓の「無題」詩に唱和している。『唐才子伝校箋』巻十は、「其受辟及南征、約在是年（天復元年）夏秋間」という。ちなみに、呉融の唱和詩のみは、「和韓致光侍郎無題三首十四韻」（『全唐詩』巻六八五）として現存。霍松林・鄧小軍「韓偓年譜」中（『陝西師大學報』（哲学社会科学版）一九八八年第四期所収）参照。
- (4) 徐彦若が山南西道節度使に在任中、その幕僚（節度推官）となった。
- (5) 『唐代文学研究』（広西師範大学出版社、一九九〇年）所収。
- (6) 周祖譔主編『中国文学家大辞典（唐五代卷）』も、呉在慶執筆。ここでは、『唐詩大辞典』で犯した字の誤りも、「文吉」に訂正されている。
- (7) 霍松林主編『万首唐人絶句校註集評』下（山西人民出版社、一九九一年）第二十七卷（二九一頁以下）参照。

(2) 王仁裕 (字德輦)

○唐僖宗広明元年庚子(八八〇)生——五代・後周世宗顯徳三年丙辰(九五六)七月二十日没、享年七十七歳。

〔論 拠〕

- ①『旧五代史』卷一一六、周・世宗紀、顯徳三年七月の条に、「庚戌(二十日)、太子太保王仁裕卒」とある。
- ②『新五代史』卷五七、王仁裕伝に、「顯徳三年卒、年七十七」とある。
- ③清の呉任臣『十国春秋』卷四四、王仁裕伝に、「周顯徳三年卒、年七十七」とある。

生年は、②と③に記される享年「七十七」によって逆算。

〔備 考〕

胡文楷「薛史《王仁裕伝》輯補」は、王仁裕の事跡を知るうえで有用な労作ではあるが、ただその生年を一年早い僖宗の乾符六年己亥(八七九)とする説には従いがたい。これは特別の論拠にもとづく「新説」ではなく、没年と享年にもとづいて生年を逆算するとき、通常の虚歳(数え年)を用いずに、享年を周歳(満年齢)と見なして算出したものである。当時の年齢の数え方(虚歳)を考えれば、その説は誤りであろう。呉文治『中国文学史大事年表』(上)や周勛初主編『唐詩大辞典』(呉在慶執筆)などに「八八〇―九五六」とするのが妥当である。また、『全唐詩』卷七三六の小伝には、「周顯徳初卒」という。顯徳年間をあしかけ七年(九五四―六〇)、「初め」という言葉で「三年」を意味するのは、かなりあいまいな表現である。ちなみに、姜亮夫『歷代名人年里碑伝総表』には、「八八〇生―九四二没、享年六十三」とする。これは、じつは馬仁裕(字德寛)と王仁裕の二人を不注意にも混同した結果である。

〔参考〕

王仁裕は五代のとき、和凝と並称された文学者。『十国春秋』の本伝には、「生平、詩を作りて万首に満ち、蜀の人、呼びて『詩の窖子』と曰ふ」とある。著書としては『開元天宝遺事』二巻が伝わり、また『太平広記』には、その『玉堂閑話』を一六〇条、『王氏見聞〔録〕』を三十一条引く。

注

- (1) 『中華文史論叢』一九八〇年第三輯。
- (2) 『全唐文』巻八八五に収める徐鉉撰「唐故德勝軍節度使……馬匡公神道碑銘」参照。
- (3) 玉堂は翰林院の意。王仁裕は五代のとき、長く翰林学士の職にあった。周助初『唐語林校証』（中華書局、一九八七年）の附録「唐語林援摛原書提要」（七九四頁）参照。
- (4) 中華書局刊『太平広記索引』（一九八二年）による。周次吉編『太平広記人名書名索引』によれば、『玉堂閑話』は一五九条である。

(3) 欧陽詢（字信本）

○陳武帝永定元年丁丑（五五七）生——唐太宗貞觀十五年辛丑（六四二）没、享年八十五歳。

〔論 拠〕

①唐の開元十五年（七二七）になる張懷瓘『書斷』巻中（唐の張彦遠輯『法書要録』巻八所収）、欧陽詢の条に、「以貞觀十五年卒、年八十五」とある。

② 『新唐書』卷一九八、儒学伝上、欧陽詢伝に、「卒、年八十五」とある。

③ 南宋の姜夔撰『絳帖平』卷一、「何氏書」の条に引く逸書『古今法書苑』(北宋の周越撰)に、「唐貞観十五年卒、年八十五」とある。

生年は没年と享年によって逆算。

〔備考〕

『旧唐書』卷一八九上、儒学伝上、欧陽詢伝には、「年八十余卒」とあり、『冊府元龜』卷七八四、総録部、寿考も同じ。この「余」は、上掲の論拠①②③によれば、「五」を指すことになる。ちなみに、錢大昕『疑年録』卷一には、「史に卒年無し」として論拠③によって生没年を確定する。この点に関して、余嘉錫「疑年録稽疑」(『余嘉錫論学雜著』所収)は、より早い唐代の文献『書斷』(論拠①)によって、生没年を定めるべきだと主張する。結果的には、③は①を傍証する論拠となっている。

〔参考〕

欧陽詢は、周知のごとく、中国書道史上、虞世南や褚遂良らとともに初唐の三大書家と称され(正楷の名家)、他方では、『芸文類聚』一百卷の編者の一人でもある。生没年は、錢大昕『疑年録』以下、異説はなく、中田勇次郎「中国書人年譜」のなかには、欧陽詢の略年譜を収めている。ちなみに、韓理洲『唐文考弁初編』「六十五 欧陽詢文考」の条に、「五五八—六四二」とするのは、単なる軽率な誤り。生没年とも一年ずつ早めなければならない。

注

(1) 『新唐書』卷七四下、宰相世系表四下には、字を「少信」とする。

(2) 叢書集成新編本（『百川学海』本）『書断』には、「列伝第三」に収める。張宗祥校明抄本『說郭』卷九二所収『書断』にも見える。

(3) 范祥雍点校本（中国美術論著叢刊・人民美術出版社、一九八四年）や、洪丕謨点校本（中国書学叢書・上海書画出版社、一九八六年）による。

(4) 『太平広記』（標点本）卷二〇八、歐陽詢の条に引く『書断』に「貞親」を「真親」に作る。これは北宋の仁宗の名「禎」との嫌名を避けたものか。陳垣『史諱举例』卷八参照。

(5) 『直齋書録解題』卷十四、雜芸類や、昌彼得『說郭考』（文史哲出版社、一九七九年）三五七頁など参照。

(6) 同編『中国書人伝』（中央公論社、一九七三年）所収。

(7) 陝西人民出版社、一九九二年。

(4) 蘇味道（字未詳）

○太宗貞觀二十二年戊申（六四八）か、翌二十三年己酉（六四九）生——中宗神竜元年乙巳（七〇五）から翌二年丙午（七〇六）八月以前の間に没、享年五十八歳。

〔論拠考〕

① 『旧唐書』卷九四、蘇味道伝には、

神竜初、以親附張易之・昌宗、貶授郿州刺史。俄而為益州大都督府長史、未行而卒、年五十八。

とあり、② 『新唐書』卷一一四、蘇味道伝にも、「張易之敗、坐党附、貶眉州刺史。復還益州長史、未就道卒、年五十八」とある。

『資治通鑑』卷二〇七や両『唐書』則天皇后紀などによれば、武后の病状が悪化した神竜元年（七〇五）正月癸卯、

(二十二日)、張柬之かんしや崔玄暉らは、寵愛をかさに権勢をふるう張易之・昌宗兄弟を誅殺して、武後の政權を打倒しようとして企てた。そこで羽林兵五百余人を率いて二人を殺し、武后に迫って太子に帝位を譲らせ、かくて中宗が再び即位して国号を唐に復した。上掲の基本資料①②によれば、蘇味道はこのとき、張易之兄弟の一派として眉州(四川省眉山付近)刺史に左遷され、ほどなく益州大都督府長史に再任されたが、着任しないうちに没したという。『太平広記』卷一四六、蘇味道の条に引く『定命録』にも、その最晩年を、

其後、出為眉州刺史。改為益州長史、勅賜紫綬。至州日、衣紫畢、其夜暴卒。

と記す。これは前掲の基本資料①②とはやや異つて、蘇味道が益州(四川省成都市)に着任した当日、急死したとする。従来、前掲の両『唐書』本伝①②に拠つて、聞一多『唐詩大系』以下、周勛初主編『唐詩大辞典』(姜光斗執筆)、周祖讓主編『中国文学家大辞典(唐五代卷)』(金涛声執筆)、呉文治『中国文学史大事年表』(上)、『中国大百科全书 中国文学Ⅱ』(馬茂元執筆)などは、みな「六四八(太宗貞觀二十二年)生—七〇五(中宗神竜元年)没」とする(生年は享年「五十八」によつて逆算)。しかしこの説は、蘇味道の眉州刺史在任期間を一年未滿(數か月)と臆測した結果にすぎない。嚴密にいえば、その眉州刺史在任期間、および益州長史任命の時期が、現在もなお未詳であるため、翌神竜二年(七〇六)に没した可能性も否定できない。郁賢皓『唐刺史考』(五)卷二二二、益州の条に、蘇味道の益州長史就任を「神竜中(未之任)」として、「神竜初」とはしていないことも充分注意されてよい。

ところで、蘇味道の死が神竜二年八月以前であることは、次に引く沈佺期の「哭蘇眉州(味道)・崔司業(融)二公」詩の序によつて明白である。

同時郎裴懷古者、作牧潭府(湖南省長沙市)。神竜二年秋八月、(沈)佺期承恩北帰、途中觀止、訪及故旧、知眉州蘇使君味道・国子崔司業融、馳旋間相次而逝。

この詩序中に言及される崔融の死が神竜二年五月十日以降であることは、拙稿「唐代作家新疑年録」(3)、崔融の条参照。その崔融と「馳旋の間。(またたくま)に、相次いで逝く」と記される蘇味道の死は、従来の通説のごとき神竜元年ではなく、崔融と同じ神竜二年である可能性が高いようである。沈佺期の詩中にも、「相看尚玄鬢、相次入黄泉」とある。ただある種の事情のために蘇味道の訃報が嶺南に左遷中の沈佺期のもとへ届かなかったことも充分考えられる。沈佺期の詩中にも、「親朋雲霧擁、生死歲時伝」とも歌われているからである。

つまり、現時点では、蘇味道の死を神竜元年の通説に特定できる確かな資料が見つかっておらず、沈佺期の詩序によつて神竜二年八月以前に没したことが確認されるにすぎない。従つて蘇味道の死没は、しばらく神竜元年から翌二年八月以前の間、と考へておくべきであろう。その生年は、前掲の資料①②に見える享年「五十八」に拠つて逆算すれば、太宗の貞観二十二年、三年(六四八―九)となる。

〔参考〕

蘇味道は、若くして同郷(趙州)の李嶠とともに「文辞(文翰)」によつて知られ、「蘇李」と並称された。(両『唐書』本伝)。また蘇味道は、崔融・李嶠・杜審言とともに「文章の四友」として「崔李蘇杜」とも呼ばれている(『新唐書』卷二〇一、文芸伝上、杜審言の条)。蘇味道は武后朝に宰相となり、物事を明白に決裁することを嫌つてあまいな態度に終始したところから、「摸稜手」(『新唐書』本伝など)、「模稜宰相」(『太平広記』卷二五九所引『盧氏雜記』)などと揶揄されたが、初唐詩人としては、都の上元節(灯籠祭り)の盛況を歌つた「正月十五夜」(『火樹銀花合、星橋鉄鎖開。…』)が有名。唐の劉肅『大唐新語』卷八、文章第十八によれば、作者数百人におよぶ上元詩のなかで、蘇味道の詩は郭利貞や崔液の詩と並ぶ絶唱であつたといふ。¹³⁾

注

- (1) 『旧唐書』卷七八、張行成伝には「正月二十日」のこととし、『旧唐書』卷六、則天皇后紀には、癸卯を癸亥に作る。いま『新唐書』卷四、則天皇后紀や、『資治通鑑』に従う。
- (2) 『旧唐書』卷九四、崔融伝に、「(長安)四年、除司礼少卿、仍知制誥。時張易之兄弟頗招集文学之士、融与納言李嶠・鳳閣侍郎蘇味道・麟台少監王紹宗等、俱以文才降節事之」とある。
- (3) 内山知也『隋唐小説研究』(木耳社、一九七七年)の「第四節 趙自勤と『定命論』(定命録)について」や、程毅中『唐代小説史話』(文化芸術出版社、一九九〇年)『定命録』の条(四六頁以下)など参照。
- (4) 中華書局、一九九二年。
- (5) 譚優学『沈佺期行年考』(同『唐詩人行年考』(統編)所収)中宗景竜元年(七〇七)の条には、『旧唐書』蘇味道伝を引いて、「味道卒于神竜元二年間」とする。ちなみに、高木正一『唐詩選』一(朝日新聞社文庫本)には、「六四八?—七〇五?」と疑問符をつける。穏当な処置である。
- (6) 明銅活字本『唐五十家詩集』に収める『沈佺期集』卷三や、明の万曆三十年序刊、許自昌編『前唐十二家詩』に収める『沈佺期集』卷下に拠る。
- (7) 一に「二年」を「三年」に作るのは誤り。拙稿「唐代作家新疑年録」(3)、崔融の条の注(2)参照。連波・査洪徳『沈佺期詩集校注』(中州書籍出版社、一九九二年)も、神竜三年に作るのは二年の誤りとする(二六八頁)。
- (8) 弘前大学人文学部『文経論叢』二五卷三号、一九九〇年所収。
- (9) 注(7)に引く『沈佺期詩集校注』に、「馳旋間」を「頃刻間、在不久的時間裏」と注する。
- (10) 『本事詩』嘲戲第七に、「開元中、宰相蘇味道与張昌齡俱有名、暇日相遇。…」とある傍点部は誤り。
- (11) 『唐語林』卷五には、「蘇味道詞垂于李嶠、時称蘇李」という。
- (12) 『全唐詩』卷六五。
- (13) ただし、『大唐新語』に「神竜之際、京城正月望日、盛飾燈影之会」とある「神竜之際」は疑問。蘇味道は神竜年間、都長安にいなかったからである。

(5) 張薦 (字孝拳)

○玄宗天宝三載甲申(七四四)生——順宗貞元二十年甲申(八〇四)七月六日没、享年六十一歲。

〔論拠〕

①張薦の友人、權德輿の「唐故中大夫、守尚書工部侍郎、兼御史大夫・史館修撰、上柱国、賜紫金魚袋、充弔贈吐蕃使、贈礼部尚書 張公〔薦〕墓誌銘并序」(『全唐文』卷五〇六)には、吐蕃の贊普(君長の称号)が貞元二十年に死去した際、入蕃弔祭使となつて吐蕃へと赴いた張薦の最晩年を記して、

貞元甲申歲(二十年)夏六月、出車国門、在途被病、秋七月戊寅(六日)、復左轂於青海之西(東?)。其孤敦簡(張薦の次子)、与軍吏章騎、護輜車而東、明年(貞元二十一年)春三月、至於京師(都長安)、天子(順宗)憫然加恩。云々といい、さらに「春秋六十一」と記す。

②韓愈ら撰『順宗実録』卷三(南宋の淳熙元年刊『昌黎先生集外文』卷八)に、

〔貞元〕二十年、吐蕃贊普死、以〔張〕薦為工部侍郎、兼御史大夫、持節弔贈、卒於赤嶺東迴紇辟。吐蕃伝帰其柩とある。地名「迴紇辟」は紇辟こつへき一作こつへき壁へき 駢へんの伝写の誤りと考えられ、迴は衍字らしい(論拠③⑤参照)。

③『旧唐書』卷一四九、張薦伝に、

〔貞元〕二十年、吐蕃贊普死、以〔張〕薦為工部侍郎、兼御史大夫、充入吐蕃弔祭使。涉蕃二千余里、至赤嶺東被病、歿於紇壁駅。吐蕃伝其柩以帰。順宗即位、凶問至、詔贈礼部尚書。

④ 『新唐書』 卷一六一、張薦伝に、

吐蕃贊普死、擢(張)薦工部侍郎、為弔祭使。……次赤嶺、被病卒、年六十一。

とある。

⑤ 『冊府元龜』 卷六六一、奉使部、守節の条に、

貞元二十年、吐蕃贊普死、以薦為工部侍郎、兼御史大夫、持節往弔贈、卒於赤眉東(眉東は衍字?)嶺東紇辟駅。

吐蕃伝帰其柩。

とあり、『冊府元龜』 卷六六三、奉使部、死事の条にも、全く同じ文が見える。また、『冊府元龜』 卷六六二、奉使部、絶域の条にもほぼ同じく見え、死歿の場所を「赤嶺東紇辟駅」とする。

生年は、①と④に見える享年「六十一」によって逆算。

〔備考〕

張薦の生没年は、陸心源『三統疑年録』 卷二や、姜亮夫『歷代名人年里碑伝総表』 以下、異説はない。ただ彼に隨行して吐蕃へ赴いた呂温に対する次の両『唐書』の行文は、張薦の死を一年遅い貞元二十一年(『永貞元年、八月改元』のごとく記し、誤解を招きやすい。

(a) 明年(貞元二十一年)、徳宗晏駕、順宗即位、張薦卒於青海、吐蕃以中国喪禍、留(呂)温経年(『旧唐書』 卷一三七、呂温伝)。

(b) (呂温) 以侍御史副張薦使吐蕃、会順宗立、薦卒於虜。虜以中国有喪、留温不遣(『新唐書』 卷一六〇、呂温伝)。

徳宗の没後、順宗が即位したのは、貞元二十一年正月のことである(新旧『唐書』 順宗紀等)。(a)(b)のみを読むかぎり、張薦は貞元二十一年に没したと推測されよう。もちろん、その死は上述のごとく、一年前の貞元二十年が正しい。ま

た、清の秦恩復校刊『呂衡州文集』（叢書集成新編本）の卷末に付す顧千里「呂衡州考証」（蕃中賀順宗登極表、呂温言）の条に、「貞元二十年の冬に至りて、薦卒す」というが、冬は秋の誤りである。

〔参考〕

張薦は、『遊仙窟』や『朝野僉載』、『竜筋鳳髓判』等の著作で知られる張鷟（字文成）の孫にあたる。いわば「小説」を執筆する家風のなかで、張薦自身も、志怪小説集『靈怪集』二巻を著した。今日、『太平広記』などに引かれて十余条の逸文が伝わるが、宋代すでに晚唐の作品を混入させた「雑乱の書」となっていた。詳しくは、程毅中『靈怪集』考¹⁰参照。

注

- (1) 『権載之文集』（四部叢刊本）卷二にも所収。ちなみに、権徳輿には、さらに貞元二十一年七月四日に作った「祭張工部文」（『全唐文』卷五〇九）や、「工部発引日、属傷足臥疾、不遂執紼」詩（『全唐詩』卷三二六）などもある。
- (2) 「左轂に復す」とは、大官が旅先の路上で死ぬことをいう。「礼記」雜記上篇にもとづく言葉。
- (3) 馬其昶校注、馬茂元整理『韓昌黎文集校注』では、文外集下巻に収める。『東雅堂昌黎外集註』卷八。なお、『順宗実録』については、拙稿「唐代作家新疑新録(5)」、『文経論叢』二七卷三号、一九九二年）の陸贄の条参照。
- (4) 『太平広記』卷四九七、張薦の条に引く。「大唐」伝載」にも、「三入蕃、歿于赤嶺」とある。赤嶺は鄯州鄯城県（今の青海省西寧市）の西、「二百里」（『資治通鑑』卷二〇二、儀鳳三年の条の胡三省注に引く北宋の宋白『統通典』の逸文参照）にある、唐と吐蕃との境界をなす山の名で、青海（湖）の東に位置する。権徳輿の「墓誌銘」①の「青海之西」は東の誤りであろう。敵耕望『唐代交通図考』第二巻の「篇拾参 河湟青海地区軍鎮交通網」によれば、赤嶺は赤砂岩からなる海拔三千八百メートルの山で、青海と黄河の分水嶺をなす。唐・蕃を結ぶ幹線上にあり（今日の日月山の隘路）、唐の開元年間、ここに唐蕃分界碑が設けられた。赤嶺の東にある乾壁駅は、吐蕃が設置したものであろう、という（五三三頁）。同巻所収の図八も参照。
- (5) 清の陳景雲『韓集点勘』卷四参照。

- (6) 『旧唐書』卷十四、順宗紀によれば、張薦に礼部尚書の官が追贈されたのは、貞元二十一年（八〇五）四月癸丑（十四日）のことである。
- (7) 小川昭一「呂温について」（同『全唐詩雜記』彙文堂書店、一九六九年所収）や、劉德重「呂温生平事迹考弁」（『文史』二七輯、一九八六年）など参照。
- (8) 張薦が『靈怪集』を書いたことは、『旧唐書』本伝、『順宗実録』、『新唐書』卷五九、芸文志、『冊府元龜』卷五五六、国史部、採撰二（ただし、明版は「令怪集」に誤る。宋版は正しく靈に作る）などに明記される。
- (9) 王夢鷗『唐人小説研究』四集（芸文印書館、一九七八年）上編三の（一）「宣室志及其作者」参照。同書は、『靈怪集』の原名は『靈仙篇』か、と臆測する。
- (10) 『文学遺産』一九八五年二期所収。

(6) 鄭 虔（字若齊^{一字}_{無謙}）

○則天武后垂拱元年乙酉（六八五）生^う——代宗広徳二年甲辰（七六四）没、享年八十歳？

〔没年の論拠〕

大暦元年（七六六）の作とされる杜甫の「八哀詩」其六「故秘書少監武功蘇公源明」詩（仇兆鰲『杜詩詳注』卷十六）には、蘇源明の没時のありさまを、「長安米万錢、凋喪尽余喘」と歌う。南宋の黄鶴の注（文淵閣四庫全書本『補注杜詩』卷十四）には、旧注を否定して、

不過言源明死時、適值歲歉而已。『旧史』、「広徳二年、自秋及冬、斗米千錢」。今云「長安米万錢」。蓋以一斛言之。史不言蘇〔源明〕与鄭〔虔〕死之年、以此詩及長安米価論之、当是其年蘇・鄭相繼而死。故云「滎陽復冥寞（滎陽の鄭虔が死亡したことをいう）。後詩又云「凶問一年俱」。

という。歳歉さいけんは凶作の年の意。『旧史』とは、『旧唐書』卷十一、代宗紀、広徳二年の条に、「自七月大雨未止、京城米斗値一千文」「是秋、蝗食田殆尽、閔輔尤甚、米斗千錢」などとある記事を指そう。また終りの詩句「凶問一年にとも俱にす」とは、杜甫の「哭台州鄭司戸（虔）・蘇少監（源明）」詩（『補注杜詩』卷二七、『杜詩詩注』卷十四、いわゆる集外詩）中の一節である。黄鶴は、この哭詩を広徳二年秋の作とし、「蘇・鄭は同ともに是れ広徳二年に死す」と補注する。この指摘は、史書に記載を欠く二人の没年を明らかにしたものととして高く評価できる。なおこの黄鶴の説は、歴代の杜詩注釈家たちに広く受け入れられてきた。たとえば、明の邵宝編『刻』杜少陵先生詩分類集註（和刻本）卷十二は、前掲の哭詩に対して、「広徳二年、鄭虔・蘇淵明相繼マツ而亡。故賦此」という。清の仇兆鰲『杜詩詳注』卷十六にも、上掲の「長安米万錢」の句（「八哀詩」の二）に対して、

広徳二年、自秋及冬、斗米千文、一斛則万錢矣。蘇・鄭皆卒於是年。故他詩曰「穀貴歿潜夫」、又曰「凶問一年俱」。

とあり、鈴木虎雄訳注『杜少陵詩集』（統国訳漢文大成 卷十四も、この説に従う。清の朱鶴齡輯注『杜工部詩集』卷十四もほぼ同じ。ちなみに、「穀貴たかくして潜夫歿す」とは、前掲の杜甫の哭詩（『哭台州鄭司戸・蘇少監』）に、「移官蓬閣後、穀貴歿潜夫」と見える句である。これは、蘇源明が秘書少監に移った後、米価騰貴のあおりを受けて餓死したことをいうらしい。四川省文史研究館編『杜甫年譜』⁶は、広徳二年（七六四）の条に、

到本年鄭虔死於台州、蘇源明餓死於長安、此二人死亡之消息伝到杜甫耳中、引起無限哀傷、写成「懷旧」与「哭台州鄭司戸蘇少監」二首沈痛詩篇。

という。ただ厳密にいえば、蘇源明が飢饉のあつた広徳二年の後半期に確かに没したとしても、杜甫の哭詩中の「凶問一年俱」（二人の訃報が、一年のうち、相継いだ）は、解釈のしかたによつては、鄭虔の死が前年の広徳元年の歳末である

可能性を若干含みうるであろうが、ひとまず鄭虔は通説のごとく、広徳二年に没したと考えるべきである。清の楊倫『杜詩鏡詮』巻一にも、哭詩の「凶問一年俱」に対して、「鄭・蘇同卒於広徳二年」と明言する。

『新唐書』巻二〇二、文芸伝中の本伝によれば、鄭虔は安祿山の乱のとき、強制されて「偽官」（水部郎中）に就いた罪を問われ、至徳二載（七五七）十二月二十九日、台州（浙江省臨海市）の司戸参軍事に左遷され、「後、数年にして卒す」という。至徳二載はあと一日（十二月三十日）しか残っておらず、その台州着任は翌乾元元年（七五八）のことである。その時点から広徳二年までは六・七年であり、まさに「後数年卒」と符合する。鄭虔は広徳二年、台州で没したと考えてよい。後引する王晚霞「鄭虔生卒年考」によれば、十五世紀前半に初修された『台臨康谷鄭氏宗譜上中下世伝』の修譜者も、広徳二年没と考えていたらしい。

〔備考〕

鄭虔の広徳二年（七六四）没説は、聞一多「少陵先生年譜会箋」、郭沫若「李白与杜甫」、黒川洋一「杜甫年譜」、吉川幸次郎「杜甫と鄭虔」などにも明示される通説であり、徐三見「鄭虔生平雜考」（後述の『鄭虔研究』所収）も同じである。ただ周助初主編『唐詩大辞典』や周祖謙主編『中国文学家大辞典（唐五代卷）』には、鄭虔の没年を「七六四？」とし、疑問符をつけている。（いずれも呉企明執筆）。これは、すでに述べた「凶問一年俱」の解釈のしかたと関連するか。

ちなみに、近藤春雄『中国学芸大辞典』¹⁹には、鄭虔の生没年は未詳としながらも、「肅宗の上元中（七六〇―七六二）に没した」とする。森下金五郎「鄭虔伝」研究²⁰も、この上元中没説に従うが、論拠が未詳である。おそらく左遷後「数年」に卒した（『新唐書』文芸伝中）ことから、左遷の至徳二載（七五七）から五年以内に没した、と臆測したのであろう。漠然とした推測の域を出ず、従いがたい。

〔生年論攷考〕

従来、鄭虔の生年は未詳であった。王晚霞「鄭虔生卒年考」は、鄭虔の没した台州付近に伝存する族譜の関係資料に拠って、次のごとく論じる（要旨、『鄭虔研究』所収の資料に拠って若干補訂する）。

現在、浙江省三門県や臨海市に伝わる『鄭氏宗譜』のなかには、鄭虔の生年に関して三説ある。

①垂拱元年（六八五）説……明の宣德九年（一四三四）初修（清の光緒年間重修）の『台臨康谷鄭氏宗譜上中下世伝』巻三に収める「若齊公伝賛」には、「司戸虔公、字無謙、一字若齊。瑤公之子。二十登進士、四十三歲謁唐玄宗皇帝、以詩書画三献。……寿八十三歲。公生于唐垂拱乙酉（元年（六八五））九月初九日戌時。……与夫人郭氏合葬臨海白石金鷄山之麓」（卒年の記載なし）とある。

②長寿元年（六九二）説……明の成化八年（一四七二）初修の（民国重修）三門石馬『鄭氏宗譜』巻一に収める「始一作祖本伝」に、「公生于唐長寿（元年）壬辰（六九二）九月九日、享寿九十三歲、卒于興元甲子（元年（七八四））九月九日。台人因以是日具礼告奠、至今七百余年、習為常祀焉」とある。

③丙寅の年（六六六）説……明の正徳年間（一五〇六―一二）に成る任陵撰「広文（広文館博士となった鄭虔）祀実紀一作記実」（三門県高槻村・石馬村譜所収）に、「生于唐之丙寅九月九日、台人因以是日告奠」とある（卒年の記載なし）。

この三説は、明初や明の中葉に成り、誤りもあるが、今日、鄭虔の生年を探る唯一の史料であり、その検討が必要となる。杜甫の「八哀詩」其七「故著作郎・貶台州司戸策陽鄭公虔」詩（『杜詩詳注』巻十六）の「早聞名公賞」句には、蘇そてい遜と鄭虔の二人が「忘年之契」を結んだとする杜甫の自注21があり、蘇遜は鄭虔よりも年長のはずである。また杜甫の「醉時歌」（原注、贈広文館博士鄭虔、『杜詩詳注』巻三）には、「時赴鄭老同襟期（時に鄭老に赴きて襟期）抱負・

志趣を同じうす」。「痛飲真吾師」と歌われ、さらに杜甫の「所思」(原注、得台州司戸虔消息、『杜詩詳注』巻八)にも、「鄭老身仍竄」とある。杜甫は鄭虔を「鄭老」「吾師」と呼んでおり、杜甫は鄭虔よりも年下のはずである。従って③の丙寅の年説はまず除外される。というのは、鄭虔の生存年代には、二つの丙寅の年―高宗の乾封元年(六六六)と玄宗の開元十四年(七二六)があるが、前者の場合は六七〇年に生まれた蘇邈²²よりも四歳年上となり、後者の場合は七二二年に生まれた杜甫よりも十四歳わかくなる。つまり、「蘇邈より年下、杜甫より年長」という判断基準にはずれ、明らかに誤りである。

ところで、垂拱元年(六八五)説によれば、鄭虔は蘇邈より十五歳わか、杜甫より二十七歳年長となる。蘇と鄭の間は「忘年の交り」の範囲には属するものの、(年齢差がそれほど離れておらず、いささか無理なようであるが、この説は、④杜詩の原意に比較的符合する。鄭虔が著作郎となつた天宝十四載(七五五)には七十一歳、台州に左遷された至徳二載(七五七)には七十三歳である。杜甫「八哀詩」(鄭虔の条)のなかに「晚就芸香閣」(秘書省に付属する著作局の著作郎に就任したことを指す)とあり、この句の前には「形骸実土木、親近唯几杖」とある。また乾元二年(七五九)に成る杜甫の「有懷台州鄭十八司戸」詩(『杜詩詳注』巻七)にも、「鳩杖近一作黄青袍」の句がある。昔、几(ひじかけ)や杖を贈わるのは、敬老の儀礼²⁴である。「礼記」曲礼上には、「大夫七十而致事。若不得謝、則必賜之几杖」とあり、『後漢書』礼儀志中にも「人始七十者、授之以玉杖。…玉杖長九尺、端以鳩鳥為飾。鳩者、不噎之鳥也。欲老人不噎」とあって、年齢のうえで合致する。⑤この譜に収める内容は、時代的にも古く溯って唐代にも詳しく、実在する(鄭虔の玄孫にあたる)晩唐の鄭瓘²⁵にも言及する。⑥「四十三歳謁唐一作玄宗皇帝」の句も参考になる。『千唐誌齋藏誌』に収める「大唐故汾州崇儒府折衝榮陽鄭府君(仁穎)墓誌銘并序」は、「従弟左監門録事參軍虔撰」である。この墓誌は開元十五年(七二七)七月に作られており、垂拱元年説によれば、この開元十五年

がちょうど四十三歳にあたり、以後、確かに絵を献上した事実もある。ただこの説にも、少し誤りがある。「二十登進士」は「未登」のほ²⁶ずであり、広徳二年の没時には八十歳のはずで、八十三歳ではない。

他方、長寿元年（六九二）説によれば、鄭虔は蘇廼より二十二歳わか、杜甫よりも二十歳年長であり、蘇と鄭との忘年の交りという点では前説よりも理想的である。しかし著作郎就任当時、六十四歳、台州への左遷時は六十歳となり、「几杖」や「鳩杖」の表現に照らしあわせると、あまり妥当ではなく、杜甫の典故の用い²⁷かたがこれほど気ままとは考えがたい。この説には明らかな誤りがある。「卒于興元甲子（七八四）、享寿九十二」、生死の日とともに「九月九日」とすること、および「台州居住数十年」。これではその没時には、杜甫はすでに世を去っており（七七〇年没）、明らかに妄りにつけ加えられた言葉である。詳細に分析すると、三説は①の『康谷鄭氏宗譜』を基にして妄りに寿命を伸ばした結果である。要するに、生年の問題に関しては、①の『康谷鄭氏宗譜』の誤りが相対的に少なく、史実にも比較的符合しており、①の垂拱元年（七八五）説を採りたい。

この王晚霞の説は、一説として充分注目に値する。歴代重修されてきた族譜の信憑性は、なかなか見きわめ²⁸がたいが、他に伝存しない貴重な資料を含みもつこともまた事実である。今日、鄭虔の生年を探る唯一の資料として、しかも十五世紀の明代以来の旧説として重要視されてよい。杜詩を材料とした王晚霞の検討も穩当であり、生日を「九月九日²⁷の戌^{いふ}の時（午後八時ごろ）」とする点も、族譜特有の記事として興味深い。呉企明は、周勛初主編『唐詩大辞典』（一九九〇年刊）では生年を「？」としたが、後の周祖譔主編『中国文学家大辞典（唐五代卷）』（一九九二年刊）では、この王説に従ったのであろう、生年を「六八五？」とする。

この垂拱元年説を傍証する資料もある。天寶十三載（七五四）春の作²⁹とされる杜甫の「醉時歌」（原注、贈広文館博士鄭虔に、鄭・杜二人の仲を「忘形到爾汝」と歌う。『杜工部草堂詩箋』卷三には、「文士伝」、禰衡有逸才、与孔融作

爾汝交。時衡年二十余、融年五十」という。垂拱元年説によれば、鄭・杜の年齢差は二十七歳であり、孔融と禰衡の年齢差にまさしく符合する。他方、②の長寿元年説によれば、二人の年齢差は二十歳となり、①の垂拱元年説よりも劣っている。この点に関して、鄧魁英・聶石樵選注『杜甫選集』（上海古籍出版社、一九八三年）も、『文士伝』を引いて、「這年杜甫四十四（三）歳、鄭虔可能比他大二十多歳、故比作禰衡与孔融的爾汝之交」という。³⁰

現時点では、明代の族譜に拠る王晚霞の説を参照して、鄭虔の生年は垂拱元年（六八五）ごろと考えてよい。ただ族譜には伝承上の誤りも往々に含まれ、確かな論拠と見なすことはできない。従って垂拱元年生―広徳二年没として計算した享年「八十歳」にも、当然疑問符がつく。

〔備考〕(1)

徐三見「鄭虔生平雜考」は、王晚霞の説とは異なり、前掲の②の長寿元年（六九二）生年説を採る。ただこの徐説は、王説と異なる特別の論拠があるわけではなく、「忘年之契」を結んだ蘇邈との年齢差は、十五歳（王説）よりも二十二歳のほうが望ましい、とする主観的な判断にすぎず、より客観的な論拠となりうる「凡杖」「鳩杖」（いずれも七十歳になって始めて賜わるもの）の語を含みもつ詩句の検討を欠き、説得力に乏しい。同じ「忘年之交」（陸羽「陸文学自伝」を結んだ陸羽と詩僧皎然の年齢差が、十三歳前後であることも考慮されてよい。

ちなみに、徐三見と同じ長寿元年説に立つ連曉鳴「鄭虔与杜甫」（『鄭虔研究』所収）は、杜甫の「有懷台州鄭十八司戸」詩（前掲）の「鳩杖近青袍」句に対して、「当時、鄭虔は六十八歳で、年齢が古稀（七十歳）に近いので、「鳩杖」の典故を用いたのだ」と指摘する。しかし、七十歳未満の鄭虔では鳩杖を賜わる資格がなく、典故の用い方として穏当ではない。結局のところ現時点では、王晚霞の拠る垂拱元年（六八五）生年説のほうがすぐれる。

〔備考〕(2)

森下金二郎「鄭虔伝」研究」も、垂拱元年ごろの生まれとする新説を出す。その内容は、ほぼ次のごとくである。

『唐才子伝』巻二に収める杜甫の「戲簡鄭広文虔、兼呈蘇司業源明」詩の「才名四十年」の句を重視する。この詩は、広文館博士から著作郎に遷任となる頃（天寶十三載（七五四）とされているから、「才名四十年」を引算すると、七一四（開元四年）となる。蘇暹の宰相在任期間は七一六―七二〇年で、年齢は四七―五一歳である。この頃の鄭虔の年齢は七十歳近いころとされているから、蘇暹の知遇「申以忘年之契」（『唐才子伝』巻二）を得たときは、三十歳ごろとなり、両者の年齢差は、ほぼ十五歳前後と推定してもよいであろう。鄭虔の没年は、上元中（七六〇―）とされているから、ほぼ七五歳前後と推定できる。この七六〇年から七五歳を引算すれば、六八五年（則天武后の垂拱元年）ということになる。従って鄭虔の生没年は、「女帝則天武后の垂拱元?―肅宗の上元中（六八五?―七六一?）」ということになる。³²

この森下説が族譜資料に拠る垂拱元年説に一致したのは、単なる偶然の結果にすぎず、じつはほとんど確かな論拠というものがない。鄭虔の没年は既述のごとく上元年間ではなく、約三年後の広徳二年である。この推論の最大の問題点は、杜甫の「戲簡鄭広文」詩が作られたとき（天寶十四載（七五五）ごろ）³³の鄭虔の年齢を「七十歳近いころとされている」とする点である。生年問題の關鍵ともいうべき本条に対して、論拠が全く明示されていない。もし本詩の作成時、鄭虔が七十歳ごろであるとすれば、その生年はただちに逆算されて六八六（垂拱二年）ごろ、となるではないか。あるいは「醉時歌」における「鄭老」という表現に着目し、これを「七十を老と曰ふ」という説解（『説文解字』巻八上）と結びつけた結果なのであろうか。ただし、老は一般に「五十から七十に到る高齢」（『漢語大字典』四）を幅広く指し、七十歳ごろに特定できない。しかも論者の重視すると述べた「才名四十年」の句自体は、四十を「三十」に作る大きな文字の異同³⁴が存在する。たとえ「四十」のほう³⁵が穩当だとしても、重視すると明言する以上、この

点への細かな配慮も必要となろう。要するに、この森下説は論拠と論証に不備や誤りが目立ち、依拠するには不充分である。

〔参考〕

鄭虔は詩・書・画にすぐれ、玄宗から「鄭虔三絶」と評された芸術家肌の高士。杜甫や蘇源明との交遊でも知られる。吉川幸次郎「杜甫と鄭虔」には、「杜甫が真の友人として信賴をささげた人物、それは李白とともに鄭虔であったと思われる」という。晩年の左遷の地、台州における鄭虔の教化活動は、「化は台邦を被ふ」(宋の陳公輔「祝文」)、「吾が台の斯文の祖為り」(明の方孝孺「鄭氏宗譜序」)などとたたえられる。ちなみに、王晚霞主編・周奕隆助編『鄭虔研究』(浙江古籍出版社、一九九〇年)は、鄭虔の作品や資料を博搜し、台州に在住する研究者たちの成果を集めた必読の書であり、王晚霞の「鄭虔年譜」も収める。

注

- (1) 字の若斉は、南宋の楼観「楼観(少卿)祠齋壁記」(『鄭虔研究』一一八頁所収)等に拠る。王晚霞「鄭虔生卒年考」に引く明代初修の『台臨康谷鄭氏宗譜上中下世伝』には、「字無謙、一字若斉」とする。なお若斉は弱斉とも書くらしい。俞劍華編『中国美術家人名辞典』(上海人民美術出版社、一九八七年再版修訂本)など参照。
- (2) 『杜詩詳注』卷十六や、四川省文史研究館編『杜甫年譜』参照。
- (3) 連曉鳴「鄭虔与杜甫」は、詩中の「瘧病餐巴水」に着目して、「瘧疾一般発病于夏秋両季、這首「哭台州鄭司戸・蘇少監」詩、当作于広徳二年夏秋之際」という。
- (4) 『杜詩錢注』卷七にも、黄鶴の説を引く。
- (5) 徐三見「鄭虔生平雑考」に、「潜夫是蘇源明的字(『新唐書』蘇源明伝作『弱夫』)とするが、鈴木虎雄『杜少陵詩集』卷十四の注に、「後漢の王符、幽棲して潜夫論を著はす、以て蘇(源明)に比す」とあるほうが穩当であろう。
- (6) 四川人民出版社、一九五八年。

- (7) 連曉鳴「鄭虔与杜甫」は、『資治通鑑』卷二二三、広徳二年三月の条に拠つていう、宮中でさえ「兼時（二つの季節）の積へ無く」、秘書少監の蘇源明が餓死したのも道理である。蘇源明が広徳二年三月に死んだからには、鄭虔の卒時の下限は正月か二月のころであるはずだ、とする。しかし、蘇源明が「三月に死んだ」確証はなく、従つて鄭虔の死も正月から二月の間であると確定できない。
- (8) この意味では、王晚霞「鄭虔年譜」に引く高槻小房『鄭氏宗譜』に没日を「十二月十五日」とする記述が注目される。しかし、その生没年（六七六―七五八）はともに誤り、この没日の信憑性は未詳である。王晚霞自身も、「其忌辰（十二月十五日）無他史佐証、存疑」と述べる。
- (9) 吉川幸次郎「杜甫と鄭虔」や、同「杜甫詩注」（筑摩書房、一九八三年）第五冊十三頁以下参照。ちなみに、王晚霞「鄭虔年譜」至徳二年の条には、鄭虔の左遷を、杜甫が都に帰る十二月の臘日（大寒後の辰の日、前掲の『杜甫詩注』第五冊七頁によれば十二月十三日）以前と推定するが、誤りであろう。
- (10) 『唐詩紀事』卷二〇、鄭虔の条にも、『新唐書』本伝を受けて、「虔貶台州司戸參軍、後數年卒」という。
- (11) 『杜詩詳注』卷八に収める「所思」の注に、「鄭昂謂、虔貶在至徳二載十二月、其往台在乾元元年」とある。
- (12) 『唐才子伝校箋』卷二、鄭虔の条（傅璇琮執筆）には、「新伝」謂虔貶台州「後數年卒」、未言確年。按杜甫有「有懷台州鄭十八司戸」（『錢注杜詩』卷三）、「所思」（同上卷二二、題下自注「得台州鄭司戸虔消息」）、諸家詩注及年譜、以前詩作於乾元二年（七五九）杜甫客秦州時、以後詩作於上元二年（七六一）杜甫在成都時、則此時虔尚在世。至大曆二年（七六七）作「八哀詩」、則虔已於此前去世。其生卒年無可確考」という。生年はともかく、没年までも未詳とするのは不可解。単純な資料調査ミスか。ちなみに、『太平広記』卷一四八、鄭虔の条に引く『前定録』に、「貶温州司戸而卒」とあり、同書卷八二、鄭相如の条に引く『広異記』？に「貶衢州司戸、至任而終」とあるが、傍点部はいずれも台州の誤り。『封氏聞見記』卷五、凶画の条に、「鄭虔 宦途屯蹇、終於台州司戸焉」とあるのが正しい。
- (13) 『杜甫研究学刊』一九八九年二期所収。「鄭虔 宦途屯蹇、終於台州司戸焉」とあるのが正しい。
- (14) 同『唐詩雜論』（古籍出版社、一九五七年三版）所収。
- (15) 人民文学出版社、一九七二年再版の三一〇頁参照。
- (16) 鈴木虎雄・黒川洋一『杜詩』第八冊（岩波文庫、一九六六年）所収。
- (17) 『吉川幸次郎全集』第十二卷（筑摩書房、一九六八年）所収。
- (18) 王晚霞「鄭虔生卒年考」にいう、「鄭虔当卒于蘇源明之前、均在同一年。因此鄭虔当卒于広徳二年上半年、或是再推前幾箇月、到七六三年底左右、超過這箇限度、就会涉及蘇源明的卒年、不符合杜甫詩意」と。

- 大修館書店、一九七八年。
- (19) 『宮城学院女子大学研究論文集』七四号、一九九一年。
- (20) 「往者、公（鄭虔）在疾、蘇公頹位尊望重、素未相識、早愛才名、躬自撫問、臨以忘年之契、遠邇嘉之」。ちなみに、唐の張彦遠『歷代名画記』巻九にも、「蘇許公為宰相、申以忘年之契」とある。
- (21) 拙稿「唐代作家新疑年録」(6)（弘前大学人文学部『文経論叢』二八巻三三号、一九九三年）、蘇頹の条参照。
- (22) 馮至編選、浦江清・吳天五注『杜甫詩選』（大光出版社、一九六六年）には、「説鄭虔已七十、還做着地方小官吏、向人折腰、不得告老、实在可憐」と注する。なお鈴木虎雄訳注『杜少陵詩集』巻七には、「後世また七十以上にも賜はる。鄭虔已に老年なれば、この杖を賜はるべき身なり。青袍は台州の他の官吏の衣食をいふなるべし」云々という。
- (23) 『杜詩詳注』巻七には、「隋書」礼儀志、都下及外州人、年七十以上、賜鳩杖黃帽」とある。
- (24) 杜牧に「鄭瓏協律」詩がある（清の馮集梧『樊川詩集注』巻四）。
- (25) 王晩霞『鄭虔年譜』長安四年（七〇四）の条に引く三門県高槐村・臨海市牌前村『鄭氏宗譜』に、「至二十舉進士不第」とある。
- (26) 宋の陳公輔「祝文」にも「時維重陽、乃公誕辰」とあり、明の林国材「広文先生像賛」にも「先生之誕、重九之辰」とある。いずれも『鄭虔研究』一五〇頁所収。
- (27) 沈柔堅主編『中国美術辞典』（上海辞書出版社、一九八七年）は、生年を「七〇五年」とするが、論拠未詳。これは杜詩の「几杖」「鳩杖（黃帽）」とあわず、誤りであろう。徐三見「鄭虔生平雜考」も、その七〇五年説を否定する。
- (28) 『杜詩詳注』巻三や四川省文史研究館編『杜甫年譜』参照。
- (29) 陳尚君「石刻所見唐代詩人資料零札」（『唐代文学研究』第一輯、一九八八年）の「十、鄭虔」の条に、その年齢を杜甫より十歳あまり年長とするが、単なる臆測で従いがたい。
- (30) 王晩霞『鄭虔年譜』広徳二年（七六四）の条には、「年八十、卒于台州任上。葬于臨海大田鎮白石村金鷄山。以其故居立祠、称戸曹祠、後改称鄭広文祠。今臨海市区有広文祠、広文坊井、若齊巷（一九八〇年廢）」とある。
- (31) 同論文のまとめには、「生没年―特定できないが、へ女帝則天武后の垂拱初年（六八五―六八八）―肅宗の上元中（七六〇―七六一）であろう」という。
- (32) 『杜詩詳注』巻三や、四川省文史研究館編『杜甫年譜』など参照。
- (33) 「四十」は『新唐書』本伝、『文苑英華』巻一五一、上海図書館蔵（宋本）杜工部集』巻一、『杜詩錢注』巻一、『杜工部草堂詩箋』巻三など。「三十」は『唐摭言』巻四、師友（ただし「垂名三十年」に作る）、『杜陵詩史』巻二、『九家集注杜

詩』卷二、『杜詩詳注』卷三など。

(35) 王晚霞「鄭虔年譜」では、開元四、五年ごろ、鄭虔は宰相の蘇頲と識りあったとし、「三十年」では蘇頲の没する開元十五年の一年前にあたり、明らかに成立しがたいとする。

(36) いずれも『鄭虔研究』一五〇頁所収。

(37) 本書の閲覧は、愛知淑徳大学の寺尾剛学兄の御好意による。心から感謝したい。

(7) 武元衡（字伯蒼）

○肅宗乾元元年戊戌（七五八）十月生——憲宗元和十年乙未（八一五）六月三日没、享年五十八歳。

〔論 拠〕

宰相武元衡は、憲宗の藩鎮制御策をうけて、裴度とともに横暴な藩鎮の勢力を抑え、中央集権の回復をめざした。

元和十年正月、まず淮西節度使吳元済を討伐することになる。かくて、利害関係を同じくする成徳軍節度使王承宗や平盧軍節度使李師道らも、身の危険を感じてともに策動し、武・裴の二人に向けて刺客を放った。その後の結末は、以下のようである。

① 『旧唐書』卷十五、憲宗紀下、元和十年六月の条に、「癸卯（三日）、鎮州節度使王承宗遣盜夜伏於靖安坊（武元衡の邸宅がある都長安の坊名）、刺宰相武元衡、死之」とある。

② 『旧唐書』卷三七、五行志に、「元和（年号）小兒謠云、『打麦、打麦、三三三』²、乃轉身曰、『舞了也』。及武元衡為盜所害、是元和十年六月三日」とある。

③ 『旧唐書』 卷一五八、武元衡伝には、刺客に殺された状況を、次のように詳述する。

元衡宅在靜靖^{一作}安里。〔元和〕九〔十の誤り〕年六月三日、將朝、出〔靜〕靖安里東門。有暗中叱使滅燭者。導騎訶之〔供まわりの者が誰^{すか}何した、賊射之中肩。又有匿樹陰突出者、以楛〔棒の意〕擊元衡左股。其徒馭已為賊所格〔撃つ、攻撃する〕。奔逸、賊乃持元衡馬、東南行十余步害之、批其顛骨〔頭蓋骨をそぎ落とす〕懷去。及衆呼偕至、持火照之、見元衡已踣〔倒れる〕於血中。即元衡宅東北隅墻之外。時夜漏未尽、陌上多朝騎及行人、鋪卒〔街をパトロールする警備兵〕連呼十余里、皆云「賊殺宰相」。声達朝堂、百官恟恟、未知死者誰也。須臾、元衡馬走至、遇人始辨之。……明年〔元和九年〕十月、李吉甫以暴疾卒。至是、元衡為盜所害、年五十八。始、元衡与吉甫齊年、又同日為宰相。……吉甫先一年、以元衡生月卒、元衡後一年、以吉甫生月卒。吉凶之数、若符会焉。先是、長安謠曰、「打麦、麦打、三三三」、既而旋其袖曰、「舞了也」。解者謂、「打麦」者、打麦時也、「麦打」者、蓋謂暗中突擊也。「三三三」、謂六月三日也。「舞了」、謂元衡之卒也。

謠言中の「麦打」は「味打」に通じて闇打ちを、「舞了」は「無了」に通じて死を意味する、と考えたわけである。ちなみに、事件の発生を元和九年とするのは、明らかに「十年」の誤り。『太平御覽』 卷七の祲星、同書卷七三三の占星、同書卷八三八の麦、の各条に引く『唐書』も、みな元和九年六月に作るが、これは論拠①②④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪によって、元和十年六月に訂正すべきである。この点は、すでに清の岑建功輯『旧唐書校勘記』 卷五三、武元衡の条（劉毓崧校）⁷や、卞孝萱『新版『旧唐書』漏校一百例』などに指摘されている。

④ 『旧唐書』 卷一五四、許孟容伝に、「会〔元和〕十年六月、盜殺宰相武元衡、并傷議臣裴度」とある。

⑤ 『新唐書』 卷七、憲宗紀、元和十年の条に、「六月癸卯、盜殺武元衡」とある。

⑥ 『新唐書』 卷六二、宰相表中、元和十年の条に、「六月癸卯、元衡為盜殺」とある。

⑦『資治通鑑』卷二二九、元和十年の条にいう、

六月癸卯、天未明、元衡入朝、出所居靖安坊東門。有賊自暗中突出射之、從者皆散走、賊執元衡馬行十余步而殺之、取其顛骨而去。

⑧『冊府元龜』卷六四、帝王部、發号令三に、「(元和)十年六月辛丑(二日)、盜殺宰相武元衡」とある。

⑨『冊府元龜』卷八九四、總録部、謠言に、「憲宗元和十年六月辛丑、盜殺宰相武元衡」とある(謠言の部分は省略)。

⑧⑨の「辛丑」は「癸卯」の誤り。①②③⑤⑥⑦参照。

⑩『冊府元龜』卷八九五、總録部、運命の条にいう、

武元衡為相。憲宗元和十年六月、為盜所害。年五十八。始、元衡与李吉甫齊年、又同日為宰相。及出鎮、分領楊・益。及吉甫既再入、元衡亦還。吉甫前一年、以元衡生月卒。元衡後一生、以吉甫生月卒。吉凶之數、若符会然。二度現れる「生月」の語を、通行の明版は「生日」に誤る。いま『宋本冊府元龜』第四冊(中華書局影印)に従う。

⑪『太平広記』卷一五四、元和二相の条に引く『感定録』(鍾輅撰)にも、

元和中、宰相武元衡与李吉甫齊年。又同日為相。及出鎮、又分領揚・益。至吉甫再入、元衡亦還。吉甫前一年、以元衡生月卒。元衡以吉甫生月遇害、年五十八。

とある。

生年は、③⑩⑪に見える享年「五十八」によつて逆算。また武元衡の生年は、③⑩⑪によれば、肅宗の乾元元年(七五八)生まれの李吉甫と同じ(齊年)である。両者間に矛盾はない。さらに③⑩⑪の、李吉甫は「元衡の生月を以て卒す」によれば、李吉甫は元和九年冬十月没(本稿の李吉甫の条参照)なので、武元衡は十月生まれとなる。

白居易は周知のごとく、元和十年八月、この武元衡暗殺事件¹¹に関する越権行為の責めにより、江州司馬に左遷された。翌元和十一年、左遷の地で作った「与楊虞卿書」（朱金城『白居易集箋校』巻四四）には、この間の経緯を次のごとくいう、

去年（元和十年）六月、盜殺右丞相（武元衡）於通衢中、迸血髓、磔髮肉¹²、所不忍道、合朝震慄、不知所云。……故武相之氣平明絕、僕之書日午入、兩日之内、滿城知之。

と。ちなみに、『旧唐書』巻一六六、白居易伝に、「（元和）十年七月、盜殺宰相武元衡」とあるが、「七月」は「六月」の誤り¹³。

『唐詩紀事』巻三三、武元衡の条には、「夜久喧暫息、池台惟月明。無因駐清景、日出事還生」という「夏夜作」詩（『全唐詩』巻三七）を引き、「明日、害に遇ふ」という¹⁴。つまり、この詩が、いわゆる詩讖^{ししん}をなしたことを示唆する¹⁵。とすれば、この「夏夜の作」は元和十年六月二日の作となるが、二日では月は出ない。『唐才子伝校箋』巻四、武元衡の条（傅璇琮執筆）には、「唐・宋の人の附会」に出るものであろうとする。

〔備考〕(2)

かねてから王叔文集団と対立し、その成員を排斥する武元衡に対して宿怨をいだいていた劉禹錫も、元和十年、連州刺史就任後ほどなく作った「代靖安佳人怨二首」のなかで、その死を歌う¹⁶。その序（「引」）には、

靖安、丞相武公居里名也。元和十一年六月、公將朝、夜漏未尽三刻、騎出里門、遇盜斃于牆下。

云々とある（瞿蜕園『劉禹錫集箋証』巻三十、下孝萱校訂『劉禹錫集』巻三十）。「元和十一年」の「一」は、もちろん衍字¹⁷。

二種の宋版（四部叢刊・大安影印本）がすでに誤る。前掲の論拠③（『旧唐書』本伝）には、武元衡が殺された時間を「夜漏未だ尽きず」としか記さないが、この詩序では、より詳細に「夜漏未だ三刻を尽くさず」という。平岡武夫『白居易

易¹⁸は、それを午前「三時三十分に近い」ころと考証する（二八二頁）。参考までに七絶二首その二をおけておきたい。¹⁹

秉燭朝天遂不回 燭を乗り天に朝して遂に回らず

路人弹指望高台 路人弾指して 高台を望む

牆東便是傷心地 牆東は便ち是れ 傷心の地

夜夜秋螢飛去来 夜夜 秋螢 飛び去り来る

秋螢は一に「流螢」に作る。明滅する螢のあえかな光は、無残な死をとげた武元衡の遊魂を暗示していよう。ちなみに、柳宗元も、この暗殺事件を聞いて「古東門行」詩一首を作っている。²⁰

〔参考〕

武元衡は、憲宗に信任された宰相の一人。李吉甫と同年に生まれ、同日（元和二年正月二十一日）に宰相となり、二人の友情は深い。『旧唐書』本伝には、「元衡は五言詩に工みにして、好事者はこれを伝へ、往々にして管弦に被らしむ」という。また『郡齋讀書志』卷四上、武元衡臨淮集兩卷の条（哀本）にいう、「議者謂へらく、唐の世に詩に工みにして宦達する者は、唯だ高適のみ。達宦にして詩工みなる者は、唯だ元衡のみ」と。武元衡の祖父、武平一（名は甄）も、宋之問や杜審言らと交遊した文学者で、中宗朝の文学動向に関する貴重な資料『景竜文館記』を著している（ただし散佚し、逸文のみ伝わる）。ちなみに、武元衡の生没年は、陸心源『三統疑年録』卷二以下、異説はない。

注

- (1) 武元衡は、じつは李師道の放った刺客に殺されたらしい。『資治通鑑』卷三三九、元和十年の条に引く『考異』参照。
- (2) 三三三は、麦打ち仕事のリズムを表すらしい。
- (3) 『新唐書』卷一五二、武元衡伝にも、ほぼ同じことが簡略に記されるが、事件発生の年月日を明示しない。

- (4) これ以下の部分は、『唐詩紀事』卷三三、武元衡の条にも見える。
- (5) これ以下の部分は、論拠⑨⑩にも見える。
- (6) 一例として『太平御覽』卷七三三、占星の条に引く『唐書』をあげれば、『元和』九年六月、武元衡為盜所害、年五十八とある。
- (7) 「十年六月三日、聞〔人銓〕本、『十』作『九』。張氏宗泰云、『一本、〔十〕作〔九〕非。拋〔憲宗〕本紀改』とある。
- (8) 同『唐代文史論叢』山西人民出版社、一九八六年所収。
- (9) ほぼ同文が、『唐会要』卷五九、兵部侍郎の条に、「其年六月、盜殺武元衡、并傷議臣裴度」として見える。ただし、「其年」は、前の文によれば「元和六年」を指すことになり、誤る。議臣は正論を建議する臣の意。
- (10) 北宋の樂史『広卓異記』卷六、「齊年同日為相」の条に引く『唐書』も、生月を「生日」に誤る。
- (11) 平岡武夫『白居易』の「宰相武元衡暗殺事件」に詳しい。
- (12) 磔は裂く意。平岡武夫『白居易』には、「毛髪や肉塊が地面にこびりつく」意とする。
- (13) 葉慶炳『兩唐書白居易伝考弁』(『淡江学報』六期、一九六七年) 参照。
- (14) 『郡齋讀書志』卷四上(袁本)、武元衡臨淮集兩卷の条にも見える。
- (15) 『唐才子伝』卷四、武元衡の条参照。
- (16) 『召溪漁隱叢話』前集卷二十一、香山居士の条に引く蔡寬夫『詩話』に、「劉禹錫・柳子厚、与武元衡素不叶。二人之貶、元衡為相時也。禹錫為『靖共(安の誤り) 佳人怨、以悼元衡之死、其美蓋快之』とある。明の胡震亨『唐音癸籤』卷二五、談叢一や、羅聯添『柳宗元事蹟繫年暨資料類編』(国立編訳館中華叢書編審委員会、一九八一年) 一五八頁、下孝萱『劉禹錫叢考』(巴蜀書社、一九八八年) 一一八〜一九頁など参照。
- (17) 南宋の葛立方『韻語陽秋』(宋版) 卷三も、『劉禹錫集』を襲つて「元和十一年」に誤る。
- (18) 筑摩書房・中国詩文選、一九七七年。
- (19) その一は、「宝馬鳴珂踏曉塵、魚文匕首犯車茵。適來行哭里門外、昨夜華堂歌舞人」である。蹋は踏む、匕首は短刀、車茵は車にしくしとね(敷物)、適來は今しがた、たった今の意。來は語助(副詞語尾)。
- (20) 羅聯添『柳宗元事蹟繫年暨資料類編』一五七頁参照。

(8) 楊 牢 (字松年)

○德宗貞元十八年壬午(八〇二)生——宣宗大中十二年戊寅(八五八)正月二日没、享年五十七歲。

〔論 拠〕

河南省文物研究所・河南省洛陽地区文管処編『千唐誌齋藏誌』一一四一番に収める唐の李輔撰「唐故〔河〕南府河南県令、賜緋魚〔袋〕 弘農楊公墓誌〔銘并序〕」には、

大中十二年〔年〕正月二日、河南県令弘農楊〔公〕、□□□□〔府〕〔旌〕善里之私第、享年五十七。……〔公諱〕

□、□松年、弘農人。

云々とある。この誌石は、破損・磨滅の度合いがかなりひどく、判別不能の字も多い。ここでは、陳尚君「石刻所見唐代詩人資料零札」(二十一、楊茂卿・楊牢・楊宇)の条や、周紹良主編・趙超副主編『唐代墓誌彙編』(大中一三七)(三三五頁)を適宜参照して掲げた。墓誌の諱は不鮮明であるが、次に引く二つの論拠によって、この墓誌が楊牢(字松年)のために作られたことが判明する。

①墓誌中に「考茂卿、皇進士及第、〔監察裏行〕、名震於時。不幸□難、護喪之礼、公能独出古〔人〕雖出死入生之□□時安〔寧〕也。往時侍御史・隴西李甘、已具論之矣」云々とあるが、この部分は内容上、『新唐書』卷一一八、李中敏伝に付す李甘伝の、

始、河南人楊牢、字松年、有至行。甘方未顯、以書薦於尹曰、「執事之部孝童楊牢、父茂卿、從田氏(田弘正)府、趙(鎮?)軍反、殺田氏、茂卿死。牢之兄蜀、三往索父喪、慮死不果至。牢自洛陽走常山(郡名、鎮州〔恒州])二

千里、号伏叛墨、委髮羸骸、有可憐状、讎意感解、以尸還之。單纒7冬月、往来太行間、凍膚皸瘃、銜哀雨血。行路稠人為牢泣。

とある部分に相当する。

②『千唐誌齋藏誌』一〇七九番に収める「滎陽鄭夫人（名は瓊）墓誌銘」10（会昌元年（八四二）の作。楊牢自身の妻の墓誌）の撰者楊牢の官銜「兗海沂密等州觀察推官、文林郎、試大理評事」が、墓誌中の「次授大理評事、充兗海觀察推官」と一致する。

かくて墓主の楊松年は、名が牢であることが明らかになった。この楊牢は大中十二年正月二日、東都洛陽（河南府）の旌（11）善里の私邸で五十七歳で没したことになる。生年は享年「五十七」に拠って逆算。

〔備考〕

楊牢の基本的な事跡は、墓誌の出土によってようやくわかるようになった。13 楊牢に関する基礎資料の一つ、『唐詩紀事』巻五三には、「牢、登大中二年進士第、最有詩名」という。清の徐松『登科記考』巻二二も、『唐詩紀事』によって、楊牢は大中二年（八四八）、進士科に及第したとするが、これは明らかな誤りである。大中二年は、楊牢四十七歳のときにあたる（墓誌）が、それより七年前の会昌元年（八四二）当時、楊牢はすでに大理評事・兗海觀察推官の職についており（前掲の妻の墓誌の官銜）、しかもこの官は解褐して宗文館校書・広文館助教を歴任した後のことであり、進士科及第は当然さらにその前である。

他方、『唐語林』巻三（周勛初『校証』本第四七〇条）には、「年十八、一上中進士第」14とあり、前掲の『唐詩紀事』巻五三にも、「年十八中第」という。楊牢が十八歳であるのは、元和十四年（八一九）である。これは、墓誌中に記される楊牢の事跡——長慶元年（八二二）に没した父に対する三年の喪に服した後、郷貢進士となり、「数年にして、これ

を甲科に得るなり」、つまり優秀な成績で進士科に及第した——と矛盾する。従ってこの十八歳及第説もまた誤りである。陳尚君「石刻所見唐代詩人資料零札」は、この誤りの原因を考察して、

『唐詩紀事』は「大和二年」を「大中二年」と誤り、大和二年当時の楊牟の年齢「二十七歳」を「二十八歳」に誤って、さらに「二」の字が脱して「十八歳」になったものか。

と述べ、その進士及第の年を大和二年（八二八）ごろと臆測する。しかしこの場合はむしろ、『唐詩紀事』の「大中二年」を「大和三年」（八二九）の形訛と考えたほうがわかりやすい。当時の楊牟は二十八歳であり、この「二」が脱して「十八歳及第」説が生まれたのであろう。あるいはまた、五歳下の弟の楊宇が大和八年（八三四）、知貢擧李漢（韓愈の女婿）のもとで及第し、そのとき二十八歳である（楊宇の墓誌参照）。牟と宇は魯魚の誤りを生じやすい。この弟の及第年齢「二十八歳」の「二」を脱したものが、兄の牟のそれとして誤り伝えられたのかも知れない。いずれにせよ、楊牟の及第は、三年の喪（父の死は八二二年）に服したあとの「数年」後にあたる大和二、三年ごろであらう。

〔参考〕

周助初主編『唐詩大辞典』や周祖謨主編『中国文学家大辞典（唐五代卷）』は、いずれも楊牟の生没年を墓誌によって「八〇二—八五八」とする（ともに呉在慶執筆）。墓誌には「集卅卷」、『唐語林』卷三には「詩集六十卷」があったとするが、今日、『全唐詩』卷五六四には、詩二首と逸句を残すのみである。¹⁶¹⁷

注

- (1) 文物出版社、一九八四年。
 (2) 『唐代墓誌彙編』には、撰者の名を「李紉」に作る。
 (3) 『唐代文学研究』第一輯（山西人民出版社、一九八八年）所収。

- (4) 上海古籍出版社、一九九二年。
- (5) 父の楊茂卿も、「河勢崑崙遠、山形函富秋」の佳句（「過華山」詩の逸句）で知られる。下孝萱『劉禹錫叢考』（巴蜀書社、一九八八年）「楊茂卿」の条や、『全唐詩補編』上に収める童養年『全唐詩統補遺』卷五「楊茂卿」の条など参照。
- (6) 長慶元年（八二一）七月二十八日の夜、成徳軍節度使田弘正が、王廷湊による鎮州の軍乱にあって將吏・家族三百余人とともに殺された事件を指す。両『唐書』穆宗紀や、両『唐書』王廷湊伝、『資治通鑑』卷二四二など参照。当時、楊牢は二十歳である。
- (7) ひとえの薄い喪服。
- (8) クンチョク。あかぎれやしもやけ。
- (9) 『全唐詩』卷五六四、楊牢小伝にも、「楊牢、字松年、弘農人。父從田弘正、死於趙軍。牢走常山二千里、号伏坂壘、求屍帰葬、銜哀雨血、時称孝童」とある。
- (10) 『唐代墓誌彙編』「会昌〇〇五」（二二二四頁）にも収める。
- (11) この字は左半分が不鮮明で、筆者の推定による。あるいは挾善里か。
- (12) 『唐語林』卷三には、「牢」在青州幕、奉使出、得疾、不診脈服藥而殞」とあるが、誤りであろう。
- (13) 王仲鏞『唐詩紀事校箋』（巴蜀書社、一九八九年）は、まだこの墓誌を引用していない。
- (14) 周勛初の校語に、「本条不知原出何書」とある。
- (15) 『千唐誌齋藏誌』一一一五番に収める楊牢の「唐故文林郎（国子）助教楊君（字）墓誌銘」（『唐代墓誌彙編』には「大中〇五九」に所収）には、「大中五年夏五月被疾、日不減、八月丁巳（十八日）終于長安宣平里之旅舎、時年四十有五」とある。これによれば、楊牢の生没年は「憲宗元和二年丁亥（八〇七）—宣宗大中五年辛未（八五二）」となる。ちなみに、この弟の楊宇の文章も、李甘らによって推賞された（同墓誌）。
- (16) このうちの一首「贈舎弟」詩は、陳尚君輯録『全唐詩統拾』卷二九には、『才調集』卷九によって弟の楊宇の作とする。しかし、清の殷元勳・宋邦綏『才調集補註』卷九や和刻本『才調集』には、作者名を楊牢としており、弟の作と速断できないようである（中華書局刊『唐人選唐詩（十種）』には、確かに楊宇に作るが…）。
- (17) 陳尚君「石刻所見唐代詩人資料零札」には、『唐詩紀事』卷五三所引の顧陶「唐詩類選後序」の中に、「大中十二年に没した「楊牢」の名が見えることよって、後序の成立を大中十年（前序の紀年）の後「四、五年間作」とする。しかし、王仲鏞『唐詩紀事校箋』卷五三の指摘するごとく、楊牢はその父の楊茂卿（元和六年の進士）の誤りと考えるべきであろう。従って『唐詩類選』の前序と後序は、ともに大中十年の作と考えてよい。拙稿「杜牧生卒年論攷考—許渾らの没年にも触れ

て」(『集刊東洋学』第六八号、一九九二年)参照。

(9) 李吉甫 (字弘憲)

○肅宗乾元元年戊戌(七五八)六月生——憲宗元和九年甲午(八一四)十月三日没、享年五十七歲。

〔論 拠〕

① 『旧唐書』卷十五、憲宗紀下、元和九年冬十月の条に、「丙午〔三旦〕、金紫光祿大夫・中書侍郎・同平章事・集賢大学士・監修国史・上柱国・趙国公李吉甫卒」とある。

② 『旧唐書』卷一四八、李吉甫伝に、「元和九年冬、暴病卒、年五十七」とある。

③ 『旧唐書』卷一〇四、武元衡伝に、「明年〔元和九年〕十月、李吉甫以暴疾卒。……始、〔武〕元衡与吉甫齐年、又同日為宰相。……吉甫先一年、以元衡生月卒。元衡後一年、以吉甫生月卒。吉凶之数、若符会焉」とある。¹⁾

④ 『新唐書』卷七、憲宗紀、元和九年十月の条に、「丙午、李吉甫薨」とある。

⑤ 『新唐書』卷六二、宰相表中、元和九年の条に、「十月丙午、吉甫薨」とある。

⑥ 『新唐書』卷一四六、李栖筠伝の付伝に、「会暴疾卒、年五十七」とある。

⑦ 『資治通鑑』卷二二九、元和九年の条に、「冬十月丙午、中書侍郎・同平章事趙公李吉甫薨」とある。

⑧ 『冊府元龜』卷三一九、宰相部、褒寵二に、「李吉甫、為中書侍郎・平章事。元和九年冬暴卒」とある。

⑨ 『冊府元龜』卷八九五、総録部、運命の条に、「始、元衡与李吉甫齐年、又同日為宰相。……吉甫前一年、以

元衡生、月卒、元衡後一年、以吉甫生、月卒。吉凶之數、若符会然」とある。二度現れる「生月」の語を、明版の通行本は「生日」に誤る。いま『宋本冊府元龜』第四冊（中華書局影印）に従う。

⑩『太平広記』卷一五四、元和二相の条に引く『感定録』（鍾輅撰）にも、「元和中、宰相武元衡与李吉甫齐年、又同日為相。……元衡以吉甫生月遇害」とある。

生年は、②⑥に記される享年「五十七」によって逆算。また、③⑨⑩によれば、肅宗の乾元元年（七五八）に生まれた武元衡と同年の生まれ（齐年）である。両者の間に矛盾はない。さらに、③⑨⑩の、武元衡は「吉甫の生月を以て卒す（書に遇ふ）」によれば、武元衡は元和十年六月の没（本稿の武元衡の条参照）なので、李吉甫は六月生まれとなる。

〔備考〕

李吉甫は、元和八年（八一三）に成る『元和郡県図志』の撰者として著名。その生没年は、清の錢大昕『疑年録』卷一以下、異説はない。ただ『太平広記』卷七二、袁隱居の条に引く唐の張讀撰『宣室志』に、「李吉甫」再入相而薨。年五十六。時元和九年十月三日也」とあるが、その享年「五十六」は「五十七」の誤り。また、次子の李徳裕が生まれた以後の李吉甫の事跡については、傅璇琮『李徳裕年譜』（齐鲁書社、一九八四年）に詳しい。

同年に生まれ、同日（元和二年正月二十一日）に宰相となった李吉甫と武元衡の二人は、深い友情に結ばれていた。その一端を物語るものとして、武元衡には元和九年の日付けをもつ「祭李吉甫文」（『全唐文』卷五三二）のほかに、その死を悼む、

甲午歳（元和九年）、相国李公（吉甫）有「北園寄贈」之作。吟玩歷時、屢促酬答、機務不暇、未及報章、今古遽分、電波増感、留墓劍而心許、感隣笛而意傷、寓哀冥寞、以広遺韻云。

という長い詩題をもつ詩がある（『全唐詩』卷三二七）。「北園寄贈の作」とは、李吉甫の「夏夜北園即時、寄門下武相公

〔元衡〕詩を指す（『全唐詩』卷三一八）。つまり、李吉甫の詩は、急死する元和九年の夏の作である。

注

- (1) 『唐詩紀事』卷三三、武元衡の条にも、同じ文が見える。
- (2) 北宋の樂史『広卓異記』卷六、「齊年同日為相」の条に引く『唐書』も、生月を「生日」に誤る。
- (3) 張永欽・侯志明点校『宣室志』（中華書局・古小説叢刊、『独異志』と合冊、一九八三年）には、卷末の「宣室志輯佚」に収める。
- (4) 武元衡は門下侍郎・平章事であった。

(10) 李 嶠（字巨山）

○太宗貞觀十九年乙巳（六四五）生？——玄宗開元二年甲寅（七一四）没？ 享年七十歳。

〔論拠考〕

① 『旧唐書』卷九四、李嶠りきやう伝には、その最晩年を、

初、中宗崩、嶠密表請り処置相王（後の睿宗李旦）諸子（後の玄宗李隆基を含む）、勿令在京。及玄宗踐祚、宮内獲其表、以示侍臣。或請誅之、中書令張説曰、「嶠雖不弁逆順、然亦為當時之謀、吠非其主、不可追討其罪」。上（玄宗）從其言、乃下制曰、「……今忠邪既辨、具物惟新、賞罰尙乖、下人安勸。雖經赦令、猶宜放斥、矜其老疾、俾遂余生。宜聽隨子虔州（江西省贛州市付近）刺史暢赴任」。尋起為廬州（安徽省合肥市付近）別駕而卒。

と記す。他方、② 『新唐書』卷一二三、李嶠伝にも、中宗が崩御したとき、韋后に対して相王の諸子3を都から追い出

すべきだと主張した李嶠の上奏文の発覚と、この件に関する張説の意見を記した後、

天子（玄宗）亦顧數更赦⁴、遂免、貶滁州（安徽省滁縣附近、廬州と隣接）別駕、聽隨子虔州刺史暢之官。改廬州別駕、卒、年七十。

という。これによれば、密奏の発覚によって滁州別駕に左遷され、たまたま虔州げんしゅうに刺史として赴任する息子の李暢に、途中まで同道することが許されたことになるが、前掲の『旧唐書』本伝①に引く詔勅によれば、このときはじつは別駕に左遷されたわけではなく、天子の恩情によって「その老疾を矜あはれみ、余生を遂げしむる」ために、子の李暢の任地につき従うことが許されたと考えるべきであろう。『資治通鑑』卷二二〇、開元元年（七一三）の条には、この件をとりあげた後、「九月壬戌（二日）、以嶠子率更令暢為虔州刺史、令嶠隨暢之官」といい、『冊府元龜』卷一五二、帝王部、明罰一にも、ほぼ同じく記される。⁵かくて李嶠は、開元元年（≡先天二年）九月二日、玄宗の許しを得て子の任所虔州で余生を送ることになる。そして少くとも翌開元二年三月までは健在であった。このことは、『資治通鑑』卷二二一、開元二年三月の条に、

御史中丞姜晦以宗楚客等改中宗遺詔、青州刺史韋安石、太子賓客韋嗣立、刑部尚書趙彥昭、特進致仕李嶠、於時同為宰相、不能匡正、令監察御史郭震彈之。……甲辰（二十七日）、貶安石為沔州別駕、嗣立為岳州別駕、彥昭為袁州別駕、嶠為滁州別駕。

とあることによつて確認される。この滁州別駕への左遷については、『旧唐書』卷八、玄宗紀、開元二年の条にも、三月甲辰、青州刺史・郇国公韋安石為沔州別駕、太子賓客・逍遙公韋嗣立為岳州別駕。特進致仕李嶠先隨子在袁マ（虔の誤り）州、又貶滁州別駕、並員外置。

とある。この二つの基本資料がともに李嶠を「特進（正二品の文散官）致仕」と明記することは、李嶠が致仕の際の身

分・資格を保証されたまま、子の任所で余生を過ごしていたことを物語るであろう。

ところで『唐才子伝校箋』巻一、李嶠の条（傅璇琮執筆）には、この件に関して、『旧唐書』巻九二、韋安石伝に載せる貶謫の詔書中に李嶠の名が見えないことや、両『唐書』の韋安石ら三人の本伝のなかにも李嶠の左遷の記載がないことを理由に、

疑開元二年三月、嶠由其子虔州任所改授廬州別駕、与安石等之貶非一事、修史者不察、遂牽合為一。嶠除廬州後当不久即卒、其時約在開元二、三年間（七一四—七一五）、年七十。

という。傾聴すべき一説ではあるが、すでに致仕していた老疾の李嶠を、子のもとから引き離して州の別駕に任ずることは、左遷以外の何物でもあるまい。李嶠は開元二年三月二十七日、過去のある種の行為を再びとがめられて州の別駕に左遷されたわけであろう。その任地が『唐才子伝校箋』巻一（前掲）の指摘することく、両『唐書』本伝①②に最終官として記される廬州であったかどうかは疑問である。九世紀の初めに成り、紀伝体の唐の『国史』を主な資料源とした、史料価値の高い劉肅『大唐新語』巻八、文章第十八に、

後憲司發嶠附会韋庶人、左授滁州別駕而卒。

とあるからである。一旦許された韋后（中宗の妃）との密接な関係が再び問題視されたのかも知れない。馬茂元「李嶠生卒年弁証」（『唐詩札叢』所収）は、『通鑑』と両『唐書』本伝の記事とを折衷して、

嶠于開元元年被譴出都、隨子就養。二年春、始貶滁州別駕、尋改廬州、不久即卒。

と述べ、この説も一説として充分成りたつ。ただ馬茂元のごとく、このことからただちに李嶠が開元二年に没した、と確定するのはやや早計であろう。神田喜一郎「李嶠百詠」雑考¹⁰には、

その生卒年月は明かでない。ただ『資治通鑑』を見ると、玄宗の開元二年（七一四）三月の条に、李嶠が監察御

史郭震の彈劾によつて、廬州ママ（潯州の誤り）に貶せられたことを載せてあるから、かりにその翌年に歿したとして、大体、唐の太宗の貞觀二十年（六四六）から玄宗の開元三年（七一五）に亙つて生存してゐたことになる。おそらく当らずとも遠からずであらう。

とあり、この説も一説として充分首肯できるからである。

いずれにせよ、李嶠は開元二年三月二十七日までは確実に生存しており、享年は「七十」である（『新唐書』本伝）。しかも上掲の基本資料によれば、李嶠は開元二、三年ごろ没したと推測され、享年「七十」に拠つて逆算すれば、その生年は貞元十九、二十年となる。『唐才子伝校箋』李嶠の条（傅璇琮執筆）は、この立場である。ただ若干、開元二年没（貞觀十九年〔六四五〕生）説のほうが、開元三年没（貞觀二十年〔六四六〕生）説よりも妥当と考えられる資料が存在する。それは、『新唐書』本伝に、李嶠が「二十擢進士第」とある記事である。「貞觀十九年生—開元二年没」説によれば、李嶠が二十歳になるのは高宗の麟徳元年（六六四）であり、「貞觀二十年生—開元三年没」説では、その翌年（麟徳二年）となる。ところで清の徐松撰『登科記考』卷二によれば、じつは麟徳二年は「進士並びに落第す¹¹」、つまり及第者が全くなかつたことが判明する。従つて李嶠の二十歳及第が事実であるとすれば、「貞觀二十年生—開元三年」没説は成り立たないことになる。しかし、この論拠を必ずしも強く主張できないのは、『新唐書』本伝に「十五通五經、薛元超称之¹²。二十擢進士第、始調安定尉」とあるごとく、「二十」は成数をあげる修辭の一種にすぎないとも充分考えられるからである。『旧唐書』本伝の「弱冠拳進士¹³」とある「弱冠」は、より一層二十歳代前半を中心とした広義の用例の一つとも見なしうる。要するに現時点では、李嶠は貞觀十九年（六四五）に生まれ、開元二年（七二四）に没した、といちおう考え、その生年と没年にはともに疑問符をつけておくべきであらう。享年「七十」は『新唐書』本伝②に明記され、これは動かない。ちなみに、唐の張鷟『朝野僉載』卷二に、「黃門侍郎崔泰之

哭特進李嶠詩曰、『… 昨朝猶对坐、今日忽云亡。…』とあるのは、李嶠が左遷の地に赴任してほどなく没したことを示唆するようである。李嶠の死後の作と推定される張説の「五君詠五首」其三「李趙公嶠」詩（『全唐詩』卷八六）は、陳祖言の『張説年譜』¹⁵の考証（四一―二頁）によれば、張説が岳州刺史に在任中の開元四年十一月の作である。李嶠は遅くともそれ以前に没したことになる。

〔備考〕

姜亮夫『歴代名人年里碑伝総表』や呉文治『中国文学史大事年表』(上)に、李嶠の生没年を「六四四―七一一」と記すのは、上掲の『資治通鑑』や『旧唐書』玄宗紀の記事（開元二年三月、滁州別駕に左遷）を見落したための誤りであろう。小川環樹編『唐代の詩人―その伝記』「李嶠伝」の条（川合康三執筆）が、上掲の神田説（六四六―七一一）や聞一多「唐詩大系」の説（六四五―七一一）¹⁷、ただし六四五にもををつけるべきであろう）を捨てて姜説に従ったのは、どういふわけであろうか、理解できない。布目・中村『唐才子伝之研究』（訂正重版）は「六四四―七一一」とするが、これでは享年が七十一歳となり、『新唐書』本伝の「七十」とくい違うことになる。『中国大百科全書 中国文学I』（馬茂元執筆）に「六四五―七一一」とするのは、やや断定しすぎであり（前述）、周勛初主編『唐詩大辞典』（魏明安執筆）は神田説に近い「六四六―七一一」である。

ちなみに、羅聯添「論唐人上書与行卷」¹⁸には、「坳登科記考卷二、李嶠以高宗竜朔二年（六六二）進士擢第。是年二十歳、由是逆算、当生於太宗貞観十七年（六四三）」とある。これは「新説」のごとく見えるが、じつは『登科記考』には李嶠の及第年次を記さず、何かの誤解である。

〔参考〕

李嶠は、中国における「詠物詩集の嚆矢」、「詠物詩体の正宗」¹⁹と評される、五言律詩の詠物詩集『李嶠百詠』²⁰（則

天武后期に成り、『李嶠雜詠百廿首』『李嶠百廿詠』などとも呼ばれる二巻で知られる初唐の代表的な詩人である。²¹ 中宗の景竜年間には、宮廷詩壇の中心的人物として活躍し、唐の張説は「新詩は宇宙に冠たり」とたたえた。武后・中宗期の宰相でもある。柳瀬喜代志編著『李嶠百二十詠索引』²³は、この詩人を研究するうえで重要である。

ちなみに、『新唐書』本伝には、李嶠の文学的地位を、「その仕ふるや、前めには王勃・楊盈川（炯）と（鍾）接し、中ごろには崔融・蘇味道と名を斉しうし、晩りには諸人没して文章の宿老と為り、一時の学ぶ者、法を取る」と評する。

注

- (1) 三月二十七日以降である。
- (2) 詔勅は『冊府元龜』卷一五二、帝王部、明罰一にも収める。また『全唐文』卷二〇、元宗皇帝の条には、「斥李嶠制」として収録。
- (3) 『唐代の詩人―その伝記』『李嶠伝』に、「大臣諸王の子弟」と訳すのは誤り。
- (4) 「しばしば赦（令）を更るを顧みる」意。
- (5) 「先天二年（開元元年）九月壬戌、貶特進李嶠之子太子率更令暢為虔州刺史、嶠隨暢之任」とある。
- (6) 池田温「大唐新語」管見（『汲古』十五号、一九八九年所収）参照。
- (7) 『太平広記』卷二四〇、李嶠の条に引く『大唐新語』には「而卒」の二字を欠く。
- (8) 同『晚照樓論文集』（上海古籍出版社、一九八一年）所収。
- (9) ひき続いていう、「嶠卒年七十、則生于貞觀十九年（公元六四五年）也」と。
- (10) 『神田喜一郎全集』Ⅱ（同朋舎、一九八三年）所収。もと『ピブリア』第一輯（一九四九年）に発表。
- (11) これは、馬端臨『文獻通考』卷二九に収める「唐登科記総目」による。ちなみに、麟徳元年は進士三人及第。
- (12) 高木重俊「初唐詩人を巡る人々Ⅰ 薛元超」（『北海道教育大学紀要（第一部A）』四一巻一号、一九九〇年）にいう、「李嶠が十五歳のころは、元超は遠く饒州刺史の任にあつたから、元超が李嶠を称賛したのは、彼が右成（承）務として中

朝に復帰した竜朔二年（六六二）ごろから、彼が簡州刺史として出される翌年四月までの間であっただろう。李嶠の十八、九歳のころである。……元超の称賛が李嶠の進士及第に何らかの影響を与えた可能性も、十分に考えられるのである」と。同論文は、李嶠の生没年を「六四五ごろ―七一五ごろ」とし、二十歳で進士に及第したとするが、この生没年では、享年が七十一歳ごろとなり、穏当ではない。

(13) 『冊府元龜』卷八九三、総録部、夢徵二にも見える。

(14) 『全唐詩』卷八六九には、「哭李嶠詩」として収める。

(15) 中文大学出版社、一九八四年。

(16) 『唐才子伝校箋』卷一、李嶠の条にも、「此詩約作於開元前期張説在岳州時、嶠卒後不久」とある。

(17) 中島敏夫ほか『唐詩選』（学習研究社、一九八四年）に、「六四四―七一三、一説に六四五又は六四六生―七一四？卒」とするのにも適切。周祖譔主編『中国文学家大辞典（唐五代卷）』（金涛声執筆）には、「六四五〇―七一四？」とする。

(18) 同『唐代文学論集』上冊（台湾学生書局、一九八九年）六五頁。

(19) 前引の神田喜一郎『李嶠百詠』雑考参照。

(20) 劉開揚『唐詩論文集統集』（上海古籍出版社、一九八七年）は、「李嶠的詠物詩一百二十首、大約是奉命或為應試而作」という（五七頁）。

(21) 柳瀬喜代志『李嶠雜詠』受容史管見』（『東方』一二六号、一九九一年九月）も参考になる。ただ同論文が「玄宗の開元三年に年七十で卒した（新旧唐書本伝）」と記すのには従いがたい。新旧『唐書』本伝には、既述のごとく開元三年に没した確証はないからである。

(22) 前掲の「五君詠五首」其三「李趙公嶠」詩中の句。

(23) 東方書店、一九九一年。

（一九九四年九月二十一日写す）

（十月二十四日補訂）